

川岸に佇むアンナ

バレリー夢作 村上洋子訳



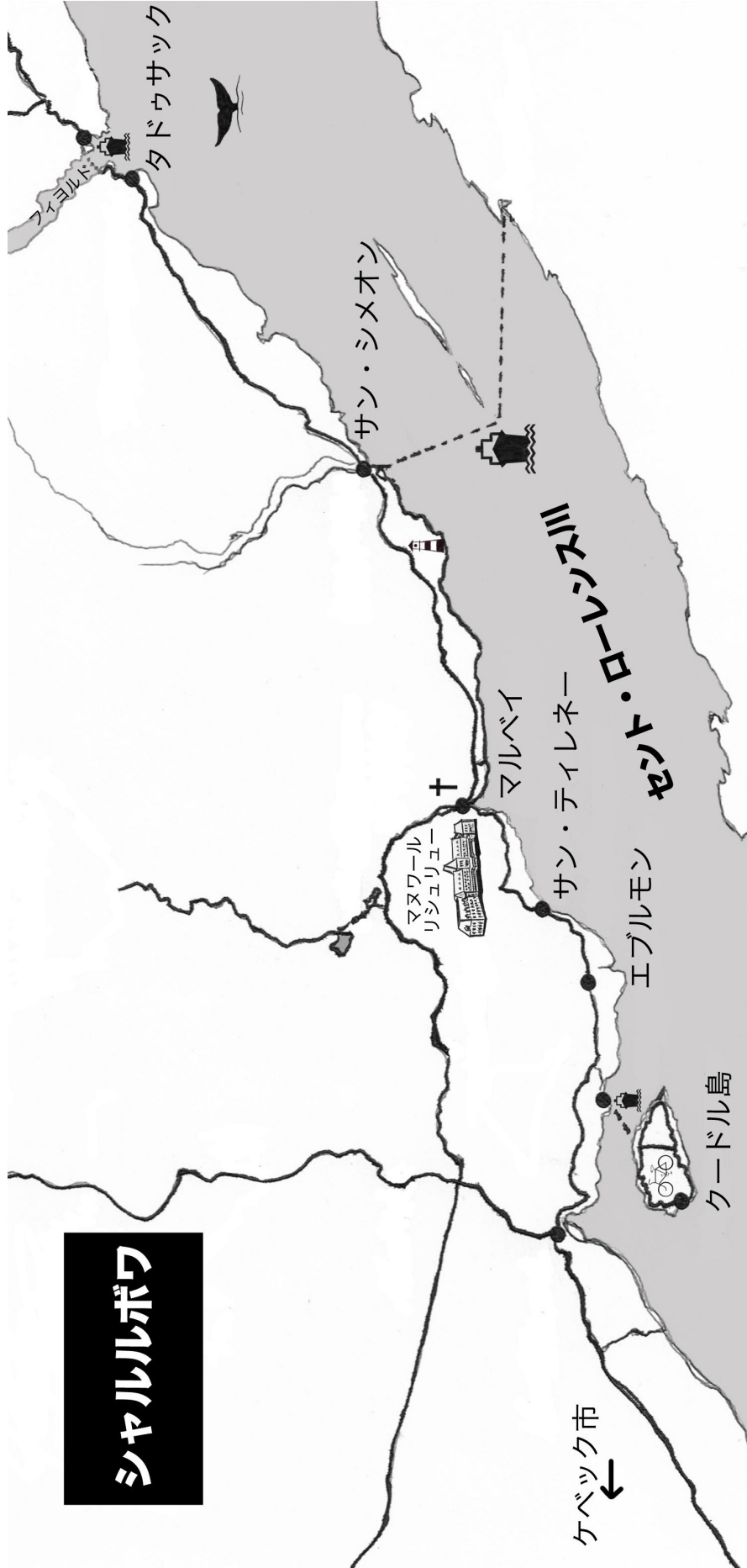
川岸に佇むアンナ

バレリー夢作

村上洋子訳

「たった数人の生き様は何百万という人たちの夢に役立つ」

フェリックス・ルクレール



見出し

プロローグ 8

一年目

行き先不安な出発 アンナの怒り 11

アンナの怒り 17

シャルルボワ地方の美しさ 21

墓地での告白 36

マルタンの本当の名前 67

セント・ローレンス川のローレライ 88

ハリウッドの不良 106

幸せな出発 133

あなたがいなくて寂しい 134

アンナへの贈り物 137

挑発 138

一日も早く 140

映画の反応 141

間もなく再会出来る 142

日道の待ち合わせ 143

吹雪の中で心を合わせる 149

プロポーズ 159

二年目

遠距離バレンタイン 168

本心を打ち明ける 170

悲劇 172

事件のまっただ中へ 173

秘密の終り	175
隠せない過去	180
他人の焼きもち	181
パパラッチの騒ぎ	184
シャルルのせいで学校中大騒ぎ	195
シャルルの魅力	209
恋愛スキャンダル	211
苦しい説明	215
ローレライの翼	223
公表された婚約	225
シャルルの両親と体面	227
芸能界ニュース チャールズ・ナイトの婚約者が写真集を出版!	237

プロローグ

8月8日

チャーター機のエンジンの音がやかましくてチャールズは眠れなかった。あれ、変だな。いつもと何だか違う。マネージャーのロバートは、この旅行を全て抜かりなく準備しておいてくれた。前もって頼んでおいた通りに、ロスから遠すぎず近すぎず、静かでゆったり休養出来るところへ二人で行く予定だった。だから、ロバートが見つけた場所がアメリカでないと思ったとき、チャールズは正直な所、かなり驚いたのだった。かと言って怒りもしなかったが。アメリカ国境を離れた筈なのに、窓から下に流れていく景色はアメリカの見慣れた景色とそう変わらない。それにしても、何だかってわざわざこんな遠いカナダまで来たんだ？

ジェット機は、チャールズがそれまで名前を聞いたことしかなかったモントリオールに着陸した。カナダの東部である。警備員や空港のスタッフが話している言葉が英語でなくフランス語だったから、とても驚いた。でもチャールズが習ったフランス語とはどこか違って聞こえる。第一、早口だ。話のスピードについていけない。チャールズが英語で聞けば答えもちゃんと英語で返って来るが、彼らの母語は英語でないことはその訛りで明らかだった。そう言えば、ロバートがチャーターしてきたジェット機のパイロットも変な英語を話してたっけ。いっそのこと、フランス語を話してくれた方がチャールズはよく分かっただろうに。まったくロバートの奴ときたら、僕を一体どこに連れて行くんだらう。

窓の外に大きな水の広がりが見えてきた。川かな？いや。川にしては幅が広すぎる。とは言っても海ほど大きくもない。ロバートが身を寄せてきてつぶやいた。

「チャールズ、あれが有名な大河、セント・ローレンス川だよ」チャールズは何も言わずにうなづく。

ロバートは、チャーター機で二人がカナダ東部のケベック州まで飛んで来たこと、ケベック州は昔、フランスの領地だったことなどをチャールズに手短かに説明したが、チャールズにはどうでもいいことだったから、ただ聞き流していた。

チャールズにとって大切だったのは、8月には暑すぎるロスと忙しすぎる仕事から逃れて、どこかでゆつくり心身ともに休めることだった。しかし小さな窓から見える小さな村々と大きな河を見ているうちに、チャールズはいささか心配になってきた。こんな所に降りたんじや、楽しむよりも退屈してしまうんじゃないだろうか。ロバートの奴、休みたい、と俺が言ったのを勘違いしたな、と思う一方で、チャールズは自分を慰めてもいた。まあ、いや。どうせ10日間だけ、結局駆け足バカンスだ。今さらロバートを叱ったり他の場所を探したりするまでのこともないか。もしここが退屈だったとしたら、逆に喜んでロスにいそいそと帰れるかも知れない。チャーター機が高度を下げて着陸態勢に入った時、チャールズはそう思いながら目を閉じていた。

その10日間が自分の人生をがらりと変えてしまうことを、チャールズは全く予想していなかった。

一年目

「生きてる今を楽しむんだ。未来は夢家に、
過去は死者にまかせておけばいい」

フェリックス・ルクレール

シャルルボワ

8月10日 ☆ 行き先不安な出発

「ああ、こんな仕事、引き受けるんじゃないかった。もう、うんざり」。ベンチに坐ったままアンナはそうつぶやいた。

アンナの仕事はプールのセキュリティ・ガードである。目の前のプールでホテルの客が大勢泳いでいた。子供たちがきやつきやつ奇声を上げて次から次へとにプールに跳び込む。アンナはベンチの上で両脚を合わせ、その前で腕を組んだ。頭を膝の上に乗せて、プールのホテル客を眺めていた。一日中、これが仕事なのである。ときどき、プールから眼を上げて壁時計を見るのだが、なかなか時間が経ってくれない。やれやれ、今日もまた、長い一日になりそうだ。本当に馬鹿だったわ、こんなつまらない仕事を引き受けちゃって。

こんな筈じゃなかったのだ。この夏は旅行代理店で働くつもりだったのだから。でも面接で落ちてしまったから仕方がない。それでこれまでと同じ、ホテルのプールのセキュリティ・ガードをしているのである。去年まで真面目に仕事をしたから、当地の有名ホテル「マヌワール・リシユリユ」は喜んでアンナを雇ってくれた。週に5日か6日だし、他の仕事と比べて給料も悪くはない。しかし、アンナはこの仕事が今では心から嫌になっていた。第一、泳ぐのが大好きなアンナにとって、泳がないでプールを見ているだけなのは、拷問だ。ホテルの客が私の代わりに泳いで楽しんでいるのだ。しかも、泳げないだけではない。プールを眺めている間、本を読んだり、音楽を聴くことも出来ないのだ。する事と言えれば、何もせずにじっと客がプールで楽しんでいるのを眺めているだけ。これより退屈な仕事があるかしら。あつ

たら教えてほしいわ。

あんまり気が塞ぐので、アンナは何か楽しいことを考えて気を紛らわせようとした。あつ、そうだった。この仕事も今日で終りなんだわ。明日はもうプールの見張りをしなくてもいい、ということ忘れていた。昨日、ホテルのマネージャーがアンナにこう言ったのだから。「アンナ、明日からは、もうプールの仕事は終りだよ。で、その代わりに頼みたいことがあるんだけど、いいかな。ウチにとつてとても大切なお客様がこのシャルボワ近辺を観光されたいとおっしゃっているんだ。そこで、君に観光ガイドをお願いしたいのさ。最初に頼もうと思ったベル・キャプテンの都合が急に悪くなってね」アンナはマネージャーのリクエストを直ちに引き受けた。その「大切なお客様」が一体何物なのか、好奇心の強いアンナは大いに興味が引かれたし、それよりも、プールをだまって見ているより、はるかに面白い仕事に違いない。今日は、この仕事が終わってから親友のモードとホテルのショーを楽しむ約束をしている。早く時間が経たないかなあ。また時計を見た。ああ、時計の針の進むのがやっぱり遅すぎるわ。

その時だった。若者が一人アンナの目の前を走っていきこうとした。

「走らないでください！Don, t run, please!」

今日、こうやって何回か走っていたのと同じ若者だった。かなりのイケメンだけど、私の嫌いなプレイボーイのタイプだわ。背が高く、筋肉質。黒い髪が顔に垂れて、ちょっと切れ長の目を隠している。私と同じくらいの年齢かしら。プールのルールなんて絶対守らないタイプ。でも私が相手だから、そうはいかないわよ。アンナは立ち上がって、つかつかと若者の方へ近づいていった。こんな若い男に馬鹿にされてたまるもんですか。

「お客様、何語を話されますか？ Which language do you speak？」

その男は声の方へ振り向いた。アンナが救助用のプラスチック・ボードを持って立っている。茶色の長い髪を頭の後ろに束ね、水着の上に「シャツを着て、サンダルをはいている。スッピンで化粧はしていない。そして、男を、刺すよ
うな鋭い黒い目で睨みつけていた。

「僕？英語もフランス語も話せるよ」男は英語と英国なまりのフランス語で答えた。

「あ、そうですか。でもそれじゃどうして私のお願いを聞いてくれないのかしら」

「お願いって？」

「プールの回りは走らないでくださいって前に一度申し上げたでしょう。お客様」

「あ、すみません。君がそこにいることに気づかなかったもので…」

「どうやら、そうみたいです」

それ以上は何も言わず、うんざりした顔でアンナは元の場所に戻った。しかし、男が自分のバスタオルを拾い上げ、後ろにいた別の男に目くばせするのを見逃しはしなかった。もう一人は大男で随分いい体格をしている。

「こっちはもしかしてボディガード？そうなら、彼は有名人なのかしら。私が注意したことをホテルに言いつけたりしないといいけど…。でも、私は別に悪いことをしてないし、有名人だってプールのルールは守ってもらわないと困るんだから」

☆☆☆

その夜、ホテルのバーでは、歌い終わったケビンに観客が熱狂的な拍手を送っていた。「ありがとうございます。それではここで休憩となります」とケビンは挨拶してステージを降り、アンナとモードが坐っているテーブルの方へやってきた。

「どの歌もみんな素晴らしかったわ、ケビン。まあ、いつものことだけども」とモードがほめた。「二人とも来てくれてありがとうね。嬉しいよ」

「そりや来るわよ。ケビンの歌が素晴らしいから。ね？アンナ」

「その通りよ。それにケビンはまだCDを出してないでしょう。だからケビンの美声はここへ来ないと聞けないんだもの」

そう言った時、アンナは午後プールで注意した男がバーに入ってくるのに気がついて、横目で男を見ていた。アンナに気がつくのと、男は手をちよつと挙げて合図した後、バーを横切って歩いて来た。アンナは、わざと男に気がつかないふりをして、三人の会話を続けた。その間ずっと、男の視線が自分に注がれるのをアンナは嫌というほど感じていた。小

休止が終わって、ステージでは第二部が始まったが、男は熱唱するケビンではなくてアンナの方ばかり見ている。アンナは居心地が悪く、わざと男の坐っているバーの方向を見ない様にしていたが、とうとうこの我慢くらべに根をあげて、ふいに立ち上がると化粧室に向かった。いやな男、こんな所にいるのはもう御免だわ。

アンナは時間をたっぷりかけて口紅の残りをきれいに拭き取り、髪を整えた。どう男に話しかけてやろうかと考えながら。ハンドバックを手に取ると、化粧室を後にした。アンナはその兄ちゃんと対決するつもりだった。私が一目惚れするだけでも女たらしのチンピラが思ってたらお生憎さま。大間違いよ。すると男は化粧室から出て来るアンナを眼で追っていたかのように、こちらに向かつて歩いて来るではないか。二人は渡り廊下の行き当たりで向い合った。アンナが身体をくると半回転させると、男はさらに近寄ってきた。

「おやおや、仕事の後、今夜はバーで一杯やろうってわけですね」と男が言う。

「お酒じゃないわ。友達の歌を聞きにきたのよ」

「どう、歌を聞いたらその後は僕の部屋に来ない？」

アンナは男の眼をしっかりと見つめてこう答えた。

「いやよ。私、あんたみたいなタイプの男なんか全く興味ないから」

それを聞いた男は特に気分を害した様には見えなかった。ただひどく驚いたようだった。アンナはアンナで、よく

知らない男からこんな失礼な言い寄られ方をしたことは初めてだったのでどきどきして、慌ててモードのいるテーブルへ小走りで戻り、坐つてからまた横目で男の様子を見ていた。男は渡り廊下でしばらく動かずにいたが、それから肩をひよいとすくめるとまた前に坐つていたバーへと戻つて行つた。バーでは美しい女性が彼が戻るのを待っていたが、男がその女性の腰に優しく手を回してエスコートし、連れ立って立ち去る際に、男は懲りずにアンナに厚かましくウインクをしたので、アンナは頭に来てこう言つた。

「何よ！人を馬鹿にしたあの態度！私に焼き餅を焼かせようって思つてんの。あの若いあんちゃん！」

いやはや何ともひどいアンナの一日だった。アンナにとってのせめてもの救いは、明日はもうプールの仕事がないということだった。

☆☆☆

悪いことは必ず続くとは、よく言ったものだ。翌朝アンナが、「シャルルボワを案内するお客様」に会いにマノワール・リシュリユーのロイヤル・スイートに出向くと、そこに立っていたのは、こともあるうに、昨夜の失礼な男ではないか。どうやら甘やかされて育ったお金持ちのお坊ちゃん。おまけに女たらしのプレイボーイときている。結局この男には、ここでバカンスをどう過ごそうがどうでもいいことなのだろう。

アンナは頭の中で「スマイル！スマイル！」と自分に言い聞かせたが、その効果はなかった。微笑んで、それがこのプレイボーイの誘惑に負けた、と思われるのも癪だ、という気がしたからだ。

男と一緒に年長の男がアンナに「どうぞこちらに来てお座りください」と招いた。言われるままにソファに腰を下ろしたが、アンナは居心地が悪かった。ぎこちない沈黙の時間がやたらに長く感じられた後、ようやく年長の男が自己紹介を始めた。あら、ケベックの話し方じゃないわ、フランスのフランス語みたい。

「初めまして、お嬢さん。私はロバートと言います。こちらは友達のマーチン。で、マーチンをこの辺りを案内して下さるのは貴女だと聞きました。その間に、私の方はビジネスの打ち合わせがありますので、マーチンをよろしくお願いますね」そう言って、ロバートはアンナに手を差し伸べた。

「お知り合いになれて光栄ですわ。私、アンナと申します」

アンナは一瞬迷ったが、結局、ロバートに続いてマーチンの方にも手を伸ばした。マーチンはその手を握ってにや

りと笑い、自己紹介もせずいきなりアンナにこう尋ねた。

「昨日はあの後、どうだったの？楽しかったかい？」

「そうですね、嫌なことがちよつとありましたけど、それ以外は最高でしたよ」

「へえ、そうかい。こっちは、あの女の子が超ナイスでね。ばっちり楽しんじゃったよ」

「あら、そうかしら。別に他の女の子でも同じだったんじゃないやありません？」

若い男は驚いて目を見開いた。いやはや、ズバリ痛い所を突かれてしまった。実はアンナの言う通りで、特に面白くもない夜だったのだ。覚えているのはプールのセキュリティだったアンナの冷たさだけだった。そして今朝、またしてもこの女のカチンと来る態度。マーチンはアンナに仕返しをしたくなった。

「ま、実はあなたの言う通りだったよ。全く、ここは何から何まで面白くない所だね。俺はどうやら世界の最果てに来ちまったみたいだよ」

この一言にアンナはかっとして思わず立ち上がった。この際、この失礼な男に私の考えをはっきり言ってやらないと。

「ここがつまらない所ですって。とんでもないわ。つまらないのは、こんな高級ホテルでプールサイドをうろつい

たり、カジノで賭けたり、そんなことしか出来ない人たちの方じゃないかしら」

「へえ、そうかい。じゃこの辺りには他にすることがあるとでも？」

アンナは握り拳に力を込めた。みるみる顔が硬直する。相手の顔を睨みつけながら言い放った。

「もちろんですよ」

「そりゃ楽しみだ。俺はさ、これまでこんなド田舎よりずっと面白いところを世界中で見て来たんだ。その俺をたっぷり楽しませてもらうじゃないか」

男の挑戦的な態度に怒ってアンナの目は輝いた。

「もちろんですよ。この辺りをお客様に案内するのが明日からの私の仕事ですから。絶対ご満足頂きますわ」

「あれ？何か変だな。君って僕が大嫌いだと思ったんだけど、案内してくれるの」

「安全な所ばかり案内しますから、どうぞご心配なく」

アンナは舌を噛んで、そう答えた。「じゃ決まりね。そういうことで」

二人のテンションの高い会話をはらはら聞いていたロバートはマーチンを見た。こんな失礼な女の子に、彼が案内

してほしいとはまさか言わないのだろうと思った。ところがマーチンはアンナとの口論を楽しんでいるみたいなのである。ロボートの視線には全く気づかず、マーチンはアンナにこう言った。

「君に案内をお願いするよ。じゃ明日の朝9時にホテルの入り口に来てくれ」「はい、でもその時刻に遅れないでくださいね」

思わぬ展開にあきれて口をぽかんと開けているロボートに、アンナは軽くお辞儀をしてその場を立ち去ったが、心の中はまだ混乱している。

どうしてあんな不愉快な男を私が案内をすることになっちゃったのかしら。どこから見てもアブない男だから気をつけなくちゃ。いいわ、私のやり方を見せてあげるから！

☆☆☆



この小説の作者『ヴァレリー・アルヴェ』は、カナダ人小説家、社会学研究者かつ作詞家、歌手である。根っからのロマンティストで、生きることに情熱を燃やしている。本作品の舞台であるケベック州シャルルボワ地方に生を受けた。カナダ国内では既に数冊の著作がある。夫婦デュエット『夢』の作詞とボーカルを担当。フランス語と日本語で歌っている。2015年のNHK Worldコンクール「We love Japanese Songs」に参加。「残酷な天使のテーゼ」を歌って審査員特別賞を獲得した。大学院生（社会学博士課程）でもあり、現在はケベック州のレヴィ市に夫と二人の子供と住んでいる。ヴァレリ・アルヴェは日本に関する本を既に6冊フランス語で出版しています。旅行エッセー、日本の少子化に関する考察、そして4～8歳の幼児を読者対象とした日本紹介の本です。

<http://www.nomadesse.com/jp>